

丘の銅像

新美南吉

青空文庫

丘^{おか}のふもとの、うつくしい平和な村に、ハンスという、詩人^{しじん}が住んでいました。

丘^{おか}の上に立つて、うつくしい村をながめては、歌にうたい、牧場^{まきば}にいつて、やさしいひつじのむれをながめては、詩^しをかくのがつねでした。ハンスのつくった詩は、国じゅう、だれひとり知らないものはないほどでした。

あるとき王さまは、この村のそばを通りかかりましたが、ハンスがこの村にいと聞いて、わざわざ、この名高い詩人^{しじん}に、あいにくられました。王さまでさえ、そんなに、ハンスをたいせつに思っているのですから、村の人たちが、ハンスをうやまつたことは、いうまでもありません。そんなわけですから、このハンスが年とつて、天国へめされていったときには、村の人たちは相談^{そうだん}をして、ハンスをいつまでもわすれないように、銅像^{どうぞう}をたてることにきめました。

三か月ほどのち、丘^{おか}の上のにれの木の下には、りっぱなハンスの銅像^{どうぞう}がたちました。ちようど、ハンスと同じ高さで、顔から形から、生きてるときの、ハンスそっくりでした。村の人たちは、その銅像^{どうぞう}を見あげては、生きてたときのハンスが、牧場^{まきば}のさくのそばで、ひつじのむれをいつまでも、じつと見つめているすがたを思い出すのでした。

ながい年月がたちました。

ハンスの生きていたころ、まだ、ほんのあかんぼうだった人たちが、今はもう、かみの毛が雪のように白くなって、まごたちのおもりをしていました。まごたちのおもりをしなから、ハンスがつくつた子守歌こもりうたをうたっていました。まごたちが「むかしばなし」をせがむと、その老人ろうじんたちは、ハンスの話をして聞かせるのでした。

それからまた、ながい年月がたちました。もう村には、ハンスのことを知ってる人は、なくなつてしまいました。けれど、丘おかの上にはまだ、ハンスの銅像どうぞうが村のほうを見おろして、ほほえみながら立っていました。

ある日、村の百しようがひとり、教会へいつて牧師ぼくしさまに、こうたずねました。

「丘おかの上に立つてござらっしゃるお方は、いったい、どなたでござんしょう。」
すると年とつた牧師ぼくしさまは、

「あれはハンスといつてな、わしのおじいさまのおじいさまが生きてござらっしゃったときより、もつといぜんに、村に住んでいらっしゃった、えらい詩人しじんじゃ。」

と、答えました。

そのころ、その国では、わるい伝染病でんせんびょうがはやっていました。伝染病は丘おかの下のうっ

くしい村へも、くろい大きな鳥のかげのように、やってきました。村の人たちは、どんどん、死んでいきました。もしも、ヘンデルという、えらいお医者^{いしや}さんが、一生けんめいにはたらくてくれなかつたら、村の人たちは伝染病^{でんせんびやう}のために、ひとりのこらず、死んでしまったかも知れません。このヘンデルが、伝染病のばいきんを見つけてくれたので、村の人たちは、病氣からすくわれるようになりました。村の人ばかりでなく、国じゅうの人がすくわれました。そこで、村の人よろこびようといったら、ありません。

ところが、そのよろこびのまつさいちゆうに、ヘンデル先生は、ふとした不注意から、ばいきんが目にはいり、それがもとで、死んでしまいました。

村の人たちは、あつまつて相談^{そうだん}しました。

「ヘンデル先生のようなえらい方は、いつまでもわすれてはいけない。」

「ヘンデル発生の銅像^{どうぞう}をたてておこう。」

そこで、ヘンデル先生の銅像^{どうぞう}をたてることに決めましたが、なにしろ、伝染病^{でんせんびやう}という大さいなんのあとだから、村はびんぼうになつてしまつて、だれもお金を出すものがありません。お金がなくては、銅像をたてることができませんので、村の人たちがこまつていると、くつ屋のじいさんが、

「それじゃあ、あの丘^{おか}の上に立つてる銅像^{どうぞう}を、あのまま、ヘンデル先生の銅像にしてしまったらどうだ。」

と、いいました。

村の人たちは、なるほど、これは名案^{めいあん}だと思いました。これなら、ちつとも、お金がいりません。それに、あの、だれだかわけのわからない銅像^{どうぞう}なんか、なくなったほうがいいのでした。

一週間ほどすると、丘^{おか}の上の銅像^{どうぞう}のあごに、あごひげがくつつけられました。ヘンデル先生は、あごひげをもっていたからでした。村の人たちは、その銅像を見あげては、沼^{ぬま}のほとりで、薬草^{やくそう}をさがしていたヘンデル先生のことを、しみじみ、思い出すのでした。十年にひとりぐらいは、村で、わるい伝染病^{でんせんびょう}にかかるものがありました。村の人たちは、ヘンデル先生の教えてくれた薬草^{やくそう}を、さっそくせんじて、病人にのませました。すると病人は、二、三日のうちに、なおってしまったのでした。村の人たちはこの薬草を、ヘンデル草とよぶようになりました。

ヘンデル草は、春になると青い芽^めをふき、秋になるとかれていきました。そうして、なん十年か、なん百年か、すぎさりました。丘^{おか}の下のうつくしい村は、むかしのとおり、

小さな村でした。けれど、村の人たちは、もうすっかり、かわっていました。ヘンデル先生のことを知ってる人は、もう、いなくなりました。ヘンデルといえば、すぐ草のことを思い出すばかりで、丘の上の、ひげをはやした銅像どうぞうのことも、むかしのヘンデル先生のことも、思い出すものはありませんでした。

しかし銅像どうぞうは、むかしとちつともかわらずに、にれの木のかげに、ぼっそり立って、村のほうにほほえみかけていました。

そのころ、この国となりの国とが、はげしい戦争せんそうをはじめました。村からも、じょうぶなわかものが、おおぜい、戦争に出ていきました。けれど戦争は、なかなかはてませんでした。となりの国は、この国より大きくって、新しい兵士へいしを、どんどん、戦争せんじょう場うへ送うつてよこすので、この国のほうは、だんだん、負けぎみになってきました。おおぜいの兵士たちが、大きなばくだんの下で、紙つきれをふつとばすように、いちどにたおれたりしました。しかし、こうしてこの国のほうが、負けそうになっていたときに、ペテロという、ひとりの馬にのったわかい指揮官しきかんが、めざましいはたらきをしたおかげで、みかたは元氣をもちかえし、とうとう、敵てきをうちやぶってしまいました。

しかしペテロは、戦たたかいのあと、馬とともに死んでいるのが発見されました。ペテロ、ペ

テロと、わかいペテロは、いちどに有名になってしまいました。このペテロは、ほかでもない、丘おかの下したのうつくしい村から、戦争せんそうにいったわかものたちのひとりでした。

みかたの勝利しょうりが、ペテロのおかげであつたということが村に知れると、村では、大さわぎがはじまりました。そして、今か今かと、ペテロや、ほかのわかものが、がいせんしてくるのを、まっていたました。

丘おかの上うへの銅像どうぞうのところに見はりがいて、遠くのほうを、目をほそくして見ていました。けれど、その見はりの目にも、ついに、わかものたちがいせんしてくるすがたは、うつりませんでした。そして、ある夕方、よわよわしい赤い夕日の道を、ながいかげをひきながら、松葉杖まつばづえにすがつて、ちんぎりちんぎり、やってくるひとりの男のすがたが見えました。これは、村から戦争せんそうにいったわかものひとり、居酒屋いざかやのむすこでした。

この居酒屋いざかやのむすこから、「戦争せんそうにいった村のわかものは、みんな戦死せんししてしまった。ペテロも戦死せんししてしまった」と聞いたとき、村の人たちは、かなしい芝居しばいを見たあとのように、首をふつて、ささやきあうばかりでした。

「ペテロのおかげで、わが国は勝つたんだ。ペテロは、わが国の英雄えいゆうだ。」

「ペテロの銅像どうぞうを、つくろうじやないか。」

「おお、そうだ。」

と、村の人たちはいいあいました。

しかし、ペテロの銅像どうぞうには、ぜひ、馬が必要ひつようでした。なぜなら、ペテロは馬にのつて、戦場せんじょうにかつやくしました。そして、馬といっしょに、死んでいました。しかし、もし、馬にまたがったペテロの銅像をつくるとなると、費用ひようがたいへんで、とうてい、そんなにたくさんのお金は、あつまらないにきまつていました。そこで小学校の先生が、すばらしいことを考え出しました。

それは、丘おかの上うかにたっている銅像どうぞうを、そのままペテロにして、馬だけを、新しくつくるということでした。みなさんは、そんな考えなら、なにもおどろくほどでもない。ハンスの銅像をそのまま、ヘンデル先生にしたのと同じようなことじゃないかと、お考えでしょう。しかし、今の村の人は、むかし、そんなことがあったとは、ちっとも知らないのです。ヘンデルも知らなきや、ハンスも知りません。ましてハンスの銅像が、ヘンデル先生の銅像になったことなど、知ろうはずがありません。

さてそこで、村人一同は、小学校の先生の考えどおりにすることにして、まず、馬をつくるために、村じゅう、一けん一けん、寄付金きふきんをあつめにいきました。

「ペテロのおかげで、わが国は勝ちました。ペテロは戦死しました。馬といっしよに、戦死しました。ペテロは、なんという、えらいわかものでしよう。ペテロの銅像をつくるために、お金を寄付してください。」

といいながら、一けん一けん、まわりました。人びとはよろこんで、お金を寄付しました。しかし、村人のなかには、戦争のために、じぶんのむすこをうしなった親たちが、たくさんいました。その親たちのところへ、お金の寄付をたのみにいくと、親たちは、ぶんしていうのでした。

「なんだ。ペテロ、ペテロって。ペテロひとり、国のためになったと思ってるのか。うちのむすこだって、りっぱに戦死したんだぞ。馬といっしよに死んでいたって、それがどうしたというんだ。馬にのつてりや、それだけらくなわけだ。うちのむすこは、馬にものせてもらえず、足をぼうのようにすりへらして、あげくのはて、戦死したんだぞ。うちのむすこの銅像でもたてるというなら、いくらでも金を出すが、ペテロなんかの銅像に、
いちもん 一文だつて出すもんか。」

そんなわけで、はじめに考えたほど、たくさんのお金があつまりませんでした。だから、はじめは、ほんとうの馬と同じ大きさの馬をつくるつもりだったのが、犬ぐらいの大きさ

のものしか、つくれないことになってしまいました。

ひと月ほどもすぎますと、丘^{おか}の上には、ふしぎな銅像^{どうぞう}ができました。一ぴきの、小さな馬をまたいで立っている、わかい軍人^{ぐんじん}の銅像でした。馬が小さくて、人間が大きいので、馬はまるで、人間のまたの下をくぐっている犬のように見えました。

わかい軍人^{ぐんじん}は、ヘンデル先生から、いつぺんにかわってしまった、ペテロでした。ペテロにはあごひげがなかったので、ヘンデル先生のあごひげは、けずりとられてしまいました。そのかわり、軍人^{ぐんじん}らしいカイゼルひげを、ぴんとはやしていました。

村人たちは、朝ばん、その人間と馬との銅像^{どうぞう}を見あげては、砲火^{ほうか}のみだれとぶなかを、馬のしりにむちをくれながら、

「すすめ！ 祖国^{そこく}のために！」

とさけんでいる、ペテロの心を思いうかべ、「おお、神よ」といって、朝飯^{あさはん}や夕飯^{ゆうはん}にとりかかるのでした。

ペテロの命^{めい}日は、十月四日でした。その日になると、毎年、村の人たちは仕事をやめて、教会にいったり、聖書^{せいしょ}を読んだりするのでした。その日を、ペテロの日といいました。

そしてまた、ひじようにながい年月が流れ去ったので、ペテロのことは、門にうたれた一本のくぎのように、わすれられてしまいました。小学生は学校で、先生から「ペテロというえらい人が、むかし、たいへんりっぱなはたらきをして、みかたに大勝利しょうりをもたらした」ということを、教わりました。そこである日、先生につれられて、丘おかの上へ遠足にきたとき、小学生のひとりが、にれの木かげの銅像どうぞうを指さして、

「先生、この人が、ペテロじゃないでしょうか。」
と、たずねました。

「こんなペテロが、あるものか。ペテロは、こんな犬にまたがって、ニヤニヤとわらっているような、へんてこな軍人ぐんじんじゃない。アレキサンドル大帝たいていのように、どうどうとしているのだ。」

と、先生は教えました。生徒は、先生のいうことが、もつともだと思いました。

ペテロのことは、わすれられてしまいましたが、村人のあいだには、まだ「ペテロの日」というのが、のこっていました。それはちょうど、ハンスやヘンデルがわすれられてしまつても、まだハンスのつくつた子守歌こもりうたや、ヘンデル草がのこっているようなものでした。十月四日になると、村人たちは、「ペテロの日」といって、仕事を休みました。水車は

そのにぶい音をやめ、馬車屋は村のはずれで、角笛つのぶえをふくのをやめるのでした。

けれど、なぜ、この日をペテロの日というのか、それを知ってる人は、ひとりもありませんでした。村でいちばん、ものしりの牧師ぼくしさんでさえ、それには、あやふやでした。人にきかれたときには、たぶん、むかしペテロというキリストさまのお弟子でしが、ギリシアへ伝道でんどうに出発した日であろうというのでした。

あるばん、村じゆうがねしずまったところに、霧きりのおくで、一ぴきの犬が、ぼうぼうとほえつづけました。朝になつてみると、さく夜、村でいちばん金持ちの地主さんのやしきに、おしいり強盗ごうとうがあつたことがわかりました。強盗はひとりでした。カイゼルひげをはやした、ものすごい男で、火のきえたえんとつから、サンタクロースのようにはいってきたので、顔が銅像どうざうのように見えました。強盗は、地主さんの寢室しんしつのドアを、コツコツとたたきましたので、地主さんは、女中でもなにか用事があつてきたのかと思つて、知らんふりしてねていました。

「ところが、あにはからんや、それが強盗ごうとうでした。」

と、地主さんは、あとで村の人たちに話しました。

強盗ごうとうは、地主さんから札さつたばをうけとると、こんどはげんかんから出ていきましたが、

そこで地主さんのゆうかな番犬、ナハトに見つかってほえつかれたので、すっかりあわててにげ出しました。が、犬はなおも追っかけましたので、強盗はついに、それをけころしてにげのびました。忠実な番犬ナハトは、じぶんのいのちをうしなつてまで、強盗をとらえようとしたのでした。

地主さんは、すっかり、感激かんげきしてしまいました。あのときの強盗ごうとうが、銅像どうぞうに似ていたことから思いついて、地主さんはぜひ、忠犬ナハトのために、銅像をたてたいと思いました。そこで、村の人たちに相談そうだんをかけてみると、村の人たちも、それはもつともなことだ、そんなすばらしい番犬は、あとあとの代まで、かたりつたえるべきであると思いました。

「そこでみなさん、ものは相談そうだんだが。」
と、地主さんは村の人たちにいうのでした。

「あの丘おかの上に立っている、あの、わけのわからぬ銅像どうぞうじゃが、あれをわたしに、まかせてくださいませんか。すればわたしが、そのあとに、忠犬ナハトの銅像をたてますから。」

村人たちのなかには、すぐ、ははあ、よくふかの地主めが、あの銅像どうぞうをつぶして、そ

の銅でつくるつもりなんだなと思いましたが、地主からは、田や畑をかりているので、反対でもして、もし田畑をかえせといわれたら、それこそたいへんですから、だまって、うつむいていました。

ひと月ほどあとの、ある日、丘^{おか}の上に、忠犬の銅像^{どうぞう}ができあがったというので、村人たちは市日のように、いそいそと、丘^{おか}の上にあつまつていきました。銅像^{どうぞう}には、まっ白な布^{きれ}が、すつぽり、かぶせてありました。村人たちはそれを見て、犬にしては大きいと思いました。

やがて地主は、えんぴ服^{ふく}をきて、シルクハットをかぶつて、かた手に竹のむちを持ち、銅像^{どうぞう}の台の上にあらわれました。そしてパラリと布^{きれ}をとりきると、犬ばかりではなく、強盗^{べこうとう}までが銅像になつていました。

「さて、心のうつくしい村人たちよ。」

と、地主さんは村人たちにむかつて、いいました。

「わたしは、あの夜のありさまを、はつきりとあらわすために、また、忠犬ナハトがごんないさましいはたらきをしたかをしめすために、強盗^{べこうとう}も銅像^{どうぞう}にきざみしました。よく、ごらんください。これが強盗です。ものすごい顔をしています。かくのごとき、カイゼル

ひげを、ぴんとはやしていたのであります。」

といって、地主さんは、むちのさきで、カイゼルひげをしめました。村人たちは、

「ほーう、おそろしいやつですね。まるで、悪魔あくまですね。こんな、ものすごいひげは、見たことがない。」

と、ペテロのひげを見て、ささやくのでした。この強盗ごうとうは、まえのペテロの銅像どうぞうでした。

「これを、よく見てください。これがわたしの愛犬にして、しかも忠犬なる、ナハトであります。このゆうかなるありさまは、どうですか。今まさに、強盗ごうとうの足にきつこうとしています。よく見てください。これが目です。これが耳です。これが前足で、これがあと足です。」

村人たちは、強盗ごうとうの横からとびかかっているナハトのすがたに、見いていました。「みなさん、ナハトはまったく、よい犬でした。足がほそく、首はぴんとしていました。」といって、地主がむちでさししめした首のところには、まだ、たてがみがのこっていました。それはペテロの馬に、すこし、手をくわえたものだったのです。

「そして、さいごにみなさん、このまえは、あまりにわたしがのぼせあがっていたために、

みなさんに、お話しするのをわすれてしまっていたことを、今ここで、お話ししなければなりません。それは、わたしがいたずらに、金をとられただけで、だまっていなかったということです。みなさん、一步まえにすすんで、目を見はって、よく見てください。この強盗のひたいを。」

ペテロのひたい、今は強盗のひたいに、深さが五センチメートル以上もあって、あきらかに、致命的な長いきずが、ぐつと、くいこんでいました。

「わたしは、金をわたしながら、左手にかくし持っていたおのでもって、ガンとひと打ち、強盗のひたいにくれてやったのでした。」

こうして、忠犬ナハトの銅像は、丘の上に立ちました。それからというものは、村ではよい犬のことを「ナハトのような犬」と、よぶようになりました。

けれど、こうした忠犬ナハトや、強盗や、地主さんの記憶も、ながい年月の流れには負けてしまうのでした。いつのまにか、そうしたものの記憶は、村人の間から、月夜のかげのように、きえていきました。ただ、「ナハトのような犬」という、ことばだけがのこりました。けれど人びとは、ナハトがいったい、なんのことやら、いっこうに知りませんでした。また、知ろうとも思いませんでした。それはちょうど、ハンスの子守歌や、へ

ンデル草や、ペテロの休日と、同じようなものでした。

村の教会は、村じゅうの建物たてもののうちで、いちばん、古いものになりました。ステンド・グラスはすすけ、天上のキリスト降誕こうたんの壁画へきがのそばには、古いつばめのすが、へばりついていました。塔とうの階段かいだんも、あまりひどくきしむので、だれもきみわるがつて、のぼらなくなりました。そこである年、村人たちは、教会をたてなおそうという、相談そうだんをしました。そのころ、村はかなり大きくなっていて、大むかし、ヘンデル先生が薬草やくそうをさがしていたあたりまで、家ができていました。そしてまた、村人たちは、なが年の平和で、たいへん、ゆたかになっていました。

そこで相談そうだんの結果けつか、新しい教会を、丘おかの上の銅像どうぞうのあるところに、たてることになりました。

あやしげな銅像どうぞうは、とりのぞかれることになりました。が、まったく、すてられたわけでは、ありませんでした。というのは、塔とうにつるす鐘かねをつくるのに、この銅像どうぞうを、つかうことになったからでした。

銅像どうぞうは、馬のひく荷車にのせられて丘おかをくだり、となり村の鋳物師いものしのところまで、ごとごと引かれていきました。鋳物師いものしのところで、強盗ごうとうと忠犬ナハトは、一つのるつぽ

の中にたたきこまれて、一つにとけあつてしまいました。そして、それから七つの、その鐘かねがつくられました。

はじめ、詩人しじんハンスであつた銅像どうぞうは、医者いしゃのヘンデル先生にかわり、つぎは軍人ぐんじんのペテロにかわり、つぎには、おそろしい強盗ごうとうにかわり、ついには、とけて七つの鐘かねになりました。そして、丘おかの上に、りっぱな教会きうかいがたつて、その塔とうの上につるされたとき、七つの鐘は、うつくしい音をひびかせて、村人たちの心に、神の国をおもわせたのでした。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話全集第一巻 ごんぎつね」大日本図書

1960（昭和35）年6月20日初版発行

1975（昭和50）年5月10日31版発行

入力：江村秀之

校正：小林繁雄

2013年7月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

丘の銅像

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>